

関東大震災

「朝鮮人虐殺」

否定論を否定する

偽史研究からの新知見

原田実

である。また東表の阿辰半斯氏は産靈神の稱に於て安冕氏と云ふがあつて本と東表の半須氏より出づともなるべく、而して姓氏錄に日槍をムスビノカミ

鮮人自ら
電と俱に
居る

震火の惨

ここに現成して、己れ自ら其の魔と俱に居る、此の魔ど、熟ら診するに寒熱の差こそあれ、苟も鮮人と名何ありや、凡そ魔の性情として常には形なく亦聲もき處に、無聲無形の呪詛が潜伏するを常とする。
大正十二年九月一日午前十一時五十八分、突如とう、東京市の世帯數四十八萬三千のうち三十萬九千四萬三千は死者傷者行衛不明者と算へられ、横濱市まで倒潰焼失したのであれば殆ど全滅であつた、さ
こと勿論なるも、只そればかりでなく、之に加ふる
者は何であつたらう。無の呪詛が有の聲象を現成し

される、
「今」は、
千古のそ
を排除、
懷疑派へ
鮮人の女
れたッ
なるも、
て、優
史を殊

関東大震災

が生んだ
偽書
を読む

偽書・偽史研究の
第一人者にして、
「江戸しぐさ」への
徹底的批判でも
知られる原田実の
最新作！

関東大震災「朝鮮人虐殺」否定論を否定する

偽史研究からの新知見

原田実

星海社

352



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

この史代原作・片渕須直監督・脚本『この世界の片隅に』（2016）は広島県呉市在住の主人公すずの戦時中の日常を丁寧を追うとともに、呉市を襲った空襲や広島市の原爆の惨禍をも描いた映画だった。その中には、日本の敗戦を告げる玉音放送の直後に、家の裏山に翻る太極旗（朝鮮独立運動の象徴、現大韓民国国旗）を見たすずが、自分たちの生活が朝鮮半島の物資と朝鮮人に依存していたことを思い知らされる展開がある。

1945年の第二次世界大戦敗戦は、大日本帝国の植民地支配の終焉であった。『この世界の片隅に』のこの場面は、一人の市井の女性の目を通してその瞬間を描いたわけである。だが、その前にも多くの日本人が焦土と瓦礫の中で植民地支配の矛盾に直面させられる事態があった。それは1923年、関東大震災直後のことである。

大災害の中、疑心暗鬼にかられた人々が、当時、関東地方に住んでいた朝鮮人（および朝鮮人に間違われた日本人や中国人）を次々と拉致殺害していった。その加害者たちは、日ごろはみ

な善良な一般人であり、その暴虐もあくまで自衛のためのものと信じていたのである。震災は、「普通の日本人」の中にわだかまっていた差別意識と排他性を暴き出してしまった。これは同胞から犠牲者を出した朝鮮人にとってだけではなく、加害者を出してしまった日本人にとっても衝撃的な事件だった。

そこから、日本人と朝鮮人の双方の中から、近代以前の歴史を遡り、日本と朝鮮が宗主国と植民地の関係になる前の両者の関係を見直そうという意識が生じてくる。そこに乗じる形で出現した偽史が本書のテーマである『契丹古伝』きつたんこでんである。

さて、近代日本は西欧列強の植民地となっているアジア諸地域の独立運動を支援し、いくつもの国について積極的にその独立を承認した。その動きはアジアにおいて西欧列強の干渉から独立を守り、立憲国家を建設した日本による革命の輸出という側面があった。

しかし、その一方で朝鮮などすでに日本の植民地となっている地域にはその抵抗を認めず、独立運動を徹底的に弾圧し続けてもいた。

その二つの方針のせめぎあいとは、たとえば、1932年に「建国」された満洲国の奇妙な立場にも見ることができる。それは日本政府から独立国として承認される一方で日本の植民地としての経営の対象でもあった。近代法制思想史専攻で現在は京都大学名誉教授の

やまむろしんいち

山室信一氏は満洲国の統治機構のちぐはぐさを、ライオンの頭にヤギの胴、ヘビの尾を持つギリシア神話の怪物キメラ（キマイラ）に譬^{たと}えている（山室信一『キメラ―満洲国の肖像』中公新書、1993）。

西欧列強からのアジアの解放を目指す理想と、アジアのより広域を占領し、植民地を維持し続けていこうとする欲望、大日本帝国はその矛盾を解消することができずに第二次世界大戦の敗戦という形で終焉を迎えた。

『契丹古伝』は関東大震災と朝鮮人虐殺事件の惨禍の中で、過去に遡って日本人と朝鮮人、さらに満洲人やモンゴル人との融和を求めるものだった。

しかし、その『契丹古伝』もまた、当時の大日本帝国が抱えていた矛盾から逃れることはできず、アジアの融和を目指す高邁な理想と、生々しい領土への欲望とともに内包するものとなった。くわしい内容については本書本文に譲ろう。

関東大震災から102年を経た今、Web上には朝鮮人虐殺事件そのものを否定するような言説が絶えなくなっている。

また、地方選挙・国政選挙問わず、外国人排斥を主張する政党がその勢力を伸ばしていることが可視化されるようになってきた。

このような時代だからこそ、私たちは歴史を見直し、かつての大日本帝国の轍を踏むことがないよう心掛けるべきだろう。本書がその一助となれば幸いである。

2025年7月7日

原田 実

はじめに 3

第1章

関東大震災が生んだ偽史 『契丹古伝』¹³

朝鮮人虐殺事件の惨状 14

浜名寛祐は二度死ぬ 16

軍人から実業家、そして宗教家に 20

東アジア各民族の祖「東大古族」 23

『契丹古伝』の内容——東大古族の構成 26

『契丹古伝』の内容——東大古族の発展 33

『契丹古伝』の内容——東大古族と西族の対立 39

『契丹古伝』の内容——契丹王宮の奇瑞と編纂の理由 49

第2章

関東大震災朝鮮人虐殺の 記録・証言を読む 55

志賀直哉が出会った殺害者たち 56

詩人・歌人たちの証言 58

日本政府も教訓として重視 63

第3章

大正時代の日本には、 何故数多くの朝鮮人が暮らしていたのか 67

虐殺の原因は朝鮮人の怨念？ 68

災害が招く流言飛語 71

朝鮮半島の利権を求めるのは古代から 73

神国思想と朝鮮 78

朝鮮通信使への誤解 82

明治6年政変と征韓論 84

福沢諭吉は侵略主義者か？ 90

甲午農民戦争から日清戦争へ 97

閔妃殺害の暴挙 100

伊藤博文暗殺と日韓併合 101

三・一独立運動 104

朝鮮半島依存の経済 106

第4章

偽史運動の諸相

——『富士文庫』と『契丹古伝』の興亡 115

昭和初期の偽史運動諸相 116

第5章

有賀成可と東大古族学会 121

ツラン主義との接触 127

高橋空山の『契丹神話（全）』 131

檀君神話と『契丹古伝』 135

朝鮮総督府の檀君神話否定 138

戦後の『契丹古伝』リバイバル 140

「探偵」と「敵」

——震災の大衆心理 147

不安心理と探偵小説 148

第6章

偽史と戦後史

——「古代史ブーム」と「檀君顕彰」

169

植民地としての戦後日本

170

古代史ブームの深層

176

韓国・北朝鮮の檀君顕彰

179

おわりに

184

第
1
章

関東大震災が
生んだ偽史
『契丹古伝』

朝鮮人虐殺事件の惨状

大正12年（1923）9月1日午前11時58分、関東地方を襲った地震は推定マグニチュード7・9という大規模なものだった。すなわち関東大震災である。

内閣府が令和5年（2023）にWeb上で設置した「関東大震災100年」特設ページ」では、震災による直接の死者・行方不明者約10万5000人、全壊・全焼住家約29万棟と推定している（かつては死者・行方不明者14万3000人という推計もあった）。

しかし、この直接死と別に関東大震災は多くの犠牲者を出した。すなわち、暴徒化した自警団と一部官憲による大量殺人事件である。その被害者の多くは朝鮮人だった。

大正15年（1926）3月、その惨劇を嘆じて次のように記した人がいた。

「無の呪詛が有の声象を現生したものではなかつたか。平素鮮人の帝都に寄居する者、之を都人二百三十万余の大衆に比すれば、其の寥寥なること辰星のまばらなるにも似つらんに、天一たび災を降すや「鮮人衆」の一叫に幾旬震駭し、朝野錯愕し、智者も度を失ひ、勇者も魂を奪はれ、牛肉の缶詰にも爆弾と驚かされ、握飯の包みにも炸薬と戦かされ、癡叫狂躁、誤つて同間の父兄を斬斫し、故なく隣街の子弟を殺傷し、血

をふむの修羅を演じたるは、前代未聞の奇変なりき。さて相率ひて己れに立返り見れば、鮮人として大震を予知したわけでなく、屋壁の倒壊に魂を消し胆を落して僅かに逃げ出し、火に追われて助を叫べる者、それが何の予定計画をもつ可き、それを此方で騒いだのは一体どうした事であつたのか、さつぱり訳の分らぬことで、恰も夢幻の尋ぬ可からざるが如く、事のその由に来路もなく去蹤もなく、只魘れて居たと云ふより外なきは、亦前代未聞の奇異である。知らず是れ何に原因して現はれたる事相なりや」

（一部旧漢字・異体字を現行の文字に訂正。以下の引用箇所も同様。）

すなわち、当時の東京市の人口約230万人からすれば、都内在住の朝鮮人は微々たるものである。しかも、地震の予知もできようはずはないのだから、震災時の朝鮮人も日本人と同様に逃げ回るしかなかった。にもかかわらず、日本人が、朝鮮人は震災時にテロを起こすためにあらかじめ爆弾を準備したなどと思ひ込み、無実の人々を殺害するような暴挙に走ったのは不可解としかいいようがない、とこの筆者は書いているのである。

筆者の名は浜名寛祐（はまな かんゆう）（1864～1938）、号を祖光という。この文章は浜名の主著『日韓正宗遡源』（1926）から引いたものである。『日韓正宗遡源』は歴史家としての浜名

のデビュー作であった。そして、関東大震災における朝鮮人虐殺の惨状は、浜名にこの著書を出す動機をもたらしたのである。

浜名寛祐は二度死ぬ

浜名は幕臣の家に生まれ、幼少より漢学に勤しんでいた。彼は明治21年（1888）に陸軍経理学校を卒業、陸軍経理局に入った。日清戦争（1894～1895）では、主計監（経理を監督する士官）として出征したという。

明治34年（1901）に彼は陸軍に休暇願を出し、ロシア語と地理の研究のために「大和商会社員」という偽の肩書と「潮野鉦之助」という偽名を得て、ロシア国内に潜入した。時まさに日露戦争（1904～1905）前夜で政情不安な時期ではあったが、だからこそ、当時の日本陸軍は少しでも満洲・ロシア現地の情報を欲していたのである。1902年にはスパイ容疑でウラジオストクの陸軍監獄に拘禁されたが浜名は日本陸軍軍人であることを白状することなく、獄中で日ロ開戦を迎えることになったという。

「潮野鉦之助」がロシア軍に捕らえられてから、ロシア領内の収容所に次々と護送され、一緒にとらわれていた民間人たちを励まし、アメリカ大使館やベルリンの日本公使とひそ

かに連絡をとって、ついに1904年12月、日本人一行827人を率いて帰国するまでの武勇伝は、浜名自身の著書『日露戦役奇伝 敵国大横断記』（1935、以下『敵国大横断記』）としてまとめられている。

なお、この帰路でドイツに滞在していた時、出会った知人から「やあ、あなたは生きておいでなのか」と驚かれたという。それで浜名は、日露開戦時、ロシアの戦時公報に日本のスパイ「潮野鉦之助」が同行の鈴木重治という人物と共に処刑されたという記事が掲載され、それが日本国内の新聞でも報道されていたことを知ったという。

「刑場の写真に余の影が写つてゐたのなら、それは余であらねばならぬ。して見ると殺されたのであらうか、幽霊といふ者は、さうした気持の者かも知れない、すると余は幽霊である、一念が同胞の帰国と共にここに來たのである、又その一念が凝つて、姿を現はしてゐるのであらう」

「数日の後露刊の画報を見るを得たが、写真中の二人は余と鈴木では無かつた。それは或る事から相識る仲となつた朝鮮人二名である。其この禍に陥るに至つた因縁談は、他日別に説話する機会あるべし」

『敵国大横断記』本文より

さて、『敵国大横断記』本文には、語り手の帰国を記した後に明治38年（1905）1月25日付・「岡両子東城士寛」^{もうりよう}名義の奇妙な追記がある。それによると、『敵国大横断記』本文は「潮野鉦之助」の帰国後に口述筆記したものである。ところがその後、大和商会は商會員「潮野鉦之助」の訃報を発表した。東城士は縁あってその遺稿を受け継いだのだという。

「岡両」とは魑魅魍魎^{ちみむりょう}、すなわち妖怪・化物のこと。東城士は西の京都に対する東の城すなわち江戸（東京）出身という名乗り、「寛」は浜名の名・寛祐からとったものであろうから、この偽名も浜名自身を意味するものとみてよいだろう。浜名はこの付記によって「潮野鉦之助」をいったんこの世から消すことを狙ったのである。

浜名は『敵国大横断記』刊行にあたって序文を付し、その中で「潮野鉦之助」の正体が自分であることを記した。

また、「潮野鉦之助」の身代わりにロシアで処刑された人物について、序文では、ロシア潜入行の当時、満洲とロシア領の接点だったハルビンに入る際に朝鮮人と旅券を交換したと記している。

「憫むべし彼の鮮人は、後に潮野の名に於て銃殺の刑に処せられ畢んぬ」

ところで1980～90年代に古代史研究家・架空戦記作家として活躍した佐治芳彦（1924～2014）はその著書の中で、浜名がハルビンに入る前に朝鮮人と旅券を交換していたなら、彼がロシア当局から日本人として遇せられたのはおかしいし、日本軍人であることがロシア側に把握されていたなら、民間人として釈放されるわけではないとの疑問を呈している（佐治芳彦『謎の契丹古伝』1990年）。

『敵国大横断記』序文で浜名は、「潮野鉦之助」のロシア潜入はあくまで軍に休暇をとつての学術調査目的で、スパイとしての任務を帯びたものではなかったことを強調している。

「同時に此に世人の誤を正し置かねばならぬ一儀がある。それは当年の潮野を略ぼ知れるが如き人の中に、往々潮野を以て敵地間諜の密命を帯びたる者と為すことである、こは誤れる憶度の流伝であつて、潮野は決して軍部特派の密偵などではなかったのである」

しかし、『敵国大横断記』本文付記で「潮野鉦之助」の死を偽装しようとしたり、身代わりとなった朝鮮人について矛盾ともとれる説明をしたことなどを見るに、彼のロシア潜入行が多分に秘密を抱えてのものだったことは間違いないさそうである。『007は二度死ぬ』（1967）という英国のスパイ映画があつたが、「潮野鉦之助」は、一度はロシアの刑場で、二度目は『敵国大横断記』本文付記の中でと、まさに二度死んだのである。

軍人から実業家、そして宗教家に

「潮野鉦之助」から軍人・浜名寛祐に戻った彼は主計将校として日口の戦場となつている満洲にふたたび渡つた。浜名の証言によると、この行軍時に彼はその後半生を大きく動かすものと出会うことになつた（これについては後述）。

大正3年（1914）、浜名は陸軍を退役、退役時の勲位・階級は従四位勲三等・六軍主計少将である。彼は実業界へと転身、南満洲太興合名会社を設立し、満洲・朝鮮で鉄道など手広く事業を展開した。

1923年、浜名は実業界を引退、「祖先」の法名で禅宗（曹洞宗）の僧籍を得た。彼は私財を投じ、満洲間島（現中華人民共和国吉林省・延边朝鲜族自治州）に曹洞宗間島別院を設

立した。

帰国後は神奈川県浦賀^{うらが}に居を構え、東アジアの歴史研究に勤しんだ。歴史研究者として

の浜名の著書としては先述の『日韓正宗遡源』と『東大古族言語史鑑』（1936）がある。

浜名が軍功を挙げたとされる日清・日露戦争は朝鮮半島の帰属をめぐる争いだった。後世に彼の名声を高めることになったロシア潜入行においても、朝鮮人が身代わりとなつたいきさつに関する謎がある。さらに彼の実業家としての活動も日韓併合（1910）で日本の植民地となった朝鮮半島の開発に関わるものである。浜名の人生には、日本に翻弄^{ほんろう}され続けた近代朝鮮史が大きく影を落としている。関東大震災における朝鮮人虐殺事件も近代朝鮮史の闇の一つであり、それが、すでに軍務からも実業からも手を引いていた浜名の行動をうながすことになったというのも象徴的である。

『日韓正宗遡源』の序文には「曹洞禅行者 浜名祖光序す」との署名がある。当時の彼が自らを曹洞宗の禅僧とみなしていたことは間違いない。

ところが一方で『日韓正宗遡源』には仏教界からではなく神道界から2人の人物が跋文^{ばつぶん}を寄せている。靖国神社宮司の加茂百樹^{かももき}（賀茂百樹、1867～1941）と神道本局管長の神崎一作^{かんざきいっさく}（1867～1938）である。

当時の靖国神社は内務省が人事を所管し、陸軍省と海軍省が祭祀さいしを統括するという軍部との結びつきが深い神社であった。神道本局は明治5年（1872）に明治政府の教部省が設置した大教院だいきょういんを前身とし、教派神道と呼ばれる神道系教団を統括する組織として機能していた。当時の日本国家による神道政策に大きな影響を及ぼしうる2つの機関のトップが浜名の歴史研究への支持を公表していたわけである。

また、明治、昭和期の古書研究で知られる「神保町のオタ」氏のブログ「神保町系オタオタ日記」では、しぶさわえいいち 渋沢栄一（1840～1931）の日記に、昭和2年3月8日、浜名寛祐の訪問があったと記されていることが指摘されている。浜名は渋沢に『日韓正宗遡源』を示して出版への賛助を求め、渋沢はそれに応じて百部購入することを約したという。

浜名への神道界の加茂・神崎らや実業界の大物・渋沢らの賛同は、浜名が軍人・実業家・宗教家として築いていた人脈の賜物たまものともいえようが、浜名の歴史研究にそれなりの社会的意義が認められていた証拠でもある。

東アジア各民族の祖「東大古族」

浜名の東アジア古代史に関する主張は次のようなものである。古代の東アジアには朝鮮人、日本人、満洲人、モンゴル人の共通の祖先となる民族がいた。浜名はその仮想上の民族を「東大古族」もしくは「東大古族」と呼んでいる。

中国大陆はもともと東大古族のものであったという。しかし、そこに西方から後の漢民族の祖先となる民族（西族）が流入してきた。西族は紀元前11世紀頃に中国の支配に成功し、東大古族はちりぢりになってしまった。この事件を中国史では殷周^{いんしゅう}革命（殷王朝から周王朝への政権交代）として記している。

西族は東大古族の中国統治の歴史を自分たちの祖先のものとして書き換え、東大古族の言葉を自分たちの文化にとりいれた。

また、中国大陆を追われた東大古族の子孫も自分たちの言語や神話を伝え続けていた。そのため、漢代以前の中国の典籍の用語や日本・朝鮮の古語には、東大古族の言語がさまざまな形で残っているというものである。

浜名の歴史・言語研究はある時期までアカデミックな世界の一部でも好意的な評価を受けていた。たとえば多数の辞典を著し、語源研究の大家と目されていた山中^{やまなか}襄^{かじょうた}太（189

5(1996)は『地名語源辞典』(1968)『国語語源辞典』(1976)などで、参考文献として『日韓正宗遡源』『東大古族言語史鑑』を用いている。

岩波文庫の『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』(和田清・石原道博編訳・1951年)でも、参考文献として『日韓正宗遡源』が挙げられており、当時は学術的な意義を認められていたことがうかがえる(ただし、1985年以降の新訂版からは浜名の著作が参考文献から外されている)。

さて、日本人と朝鮮人を同祖とみなし、さらに満洲人やモンゴル人とも関連付けるという説は大正時代においては特異なものではなかった。

社会主義者にして帝国主義者でもあった評論家の山路愛山(1865(1917)は「上古史総論」(『独立評論』大正4年2月(7月号、5月号休載)で日本建国の中心となった民族は満洲・朝鮮半島を南下してきた人々で高句麗・百濟・新羅を建てた人々とも同族だったと論じた。また、歴史学者・考古学者の喜田貞吉(1871(1939)は「日韓両民族同源論」(『歴史と民俗』第6巻第1号、大正10年7月)で、日本を建国した天孫民族は扶余族の系統で、扶余族はモンゴル・満洲と関係があり、その子孫には朝鮮民族もいると論じた。ちなみに洞富雄(1906(2000)は山路や喜田の説を戦後の江上波夫(1906(2

002)の騎馬民族征服王朝説の先駆とみなして論文集を編んでいる(洞富雄編『論集 パレオ騎馬民族説』1976年)。

しかし、浜名の東アジア民族起源論には山路や喜田と異なる特徴があった。それは浜名が自説の主な根拠を、浜名自身が満洲で発見したという新史料?に求めていたからである。浜名自身はその文献を「神領叙伝」と呼んでいた。しかし、この呼称は定着せず、昭和期の太古史研究家の間では『契丹古伝』という名で定着した。その他にも「契丹神話」「契丹秘史」(満洲・朝鮮半島での倭人の歴史という解釈から)「倭人興亡史」「北倭記」「契丹古伝」などと呼ぶ論者もいたが、これらも他の論者に継承されることはなかった。本書においても、この文献を『契丹古伝』と呼ぶことにしたい。

浜名の歴史観を考えるうえで、『契丹古伝』の内容は避けて通ることはできない。そして、関東大震災の惨状は、浜名に、単に『契丹古伝』公開の機会をもたらしただけではなく、それ以降の彼の歴史観にも大きく影を落としているように思われる。そこで煩瑣^{はんさ}ではあるが、これから浜名の解読に従いつつ、『契丹古伝』各章の内容を概説していきたい。

『契丹古伝』の内容——東大古族の構成

『契丹古伝』は全2980字の漢字からなり、固有名詞などの多くは東大古族の言語を音写した形で書かれているという。浜名はこれを46章に分割し、それぞれに訓読を施した。

ちなみに1970年代の超古代史ブーム以降、『契丹古伝』について浜名の解説に満足せず、独自の解説を行なった論者は多数いる。しかし、彼ら戦後の研究者はいずれも浜名の章立ては踏襲しており、固有名詞の訓読もほぼ従っている。

第1章「神は輝く体であり、鏡はそれをかたどるものである。故に鏡を日神体、すなわちカガミという」

第1章からいきなり日本語「神（かみ）」「鏡（かがみ）」の語源に関すると思われる記述が出てくる。浜名はこれをモンゴルなどの遊牧民族の首長の称号「可汗（カカン）」とも結びつけて解している。

第2章「日祖の名はアメウシフウカルメという。日祖がシウミスサホナで禊をする」と

日孫が生まれた」

浜名はアメウシフウカルメを「天大君靈大日靈」の意味に解し、日本神話の太陽神・皇祖神であるアマテラス（『日本書紀』に「天照大日靈尊」の神名表記あり）にあてる。日本神話ではイザナギが禊みそぎした際にアマテラス・ツクヨミ・スサノオの三神が生まれたとするが、浜名は『契丹古伝』の「日孫」は日本神話のスサノオにあたるとして、日本神話では姉弟とされるアマテラスとスサノオが『契丹古伝』では母子として伝わったとみなす。

第3章「日孫の名はアメミ・シウクシフ・スサナミコという。日祖は日孫に乳を与えて育て、高天使鶏に乗せて地上に下した。これにより日孫は神祖となった。日孫はカモ、高天使鶏はコマカケと読む。シウクシフとは東大国の皇という意味である」

浜名が日孫＝神祖をスサノオと同一視した理由はこの「スサナミコ」の名による。浜名は、太陽神信仰が日本だけでなくモンゴル、満洲、朝鮮の各民族にも共有されているとする。

第4章「神祖の一族は各地に広がった。彼らは祖廟をフトヒ、宮廷をコマヤ、国土をシウク、同族をシウカラ、民をタカラ、皇（首長）をシウクシフと呼んだ」

浜名によると「東大古族」「東大神族」という用語は「シウカラ」を意識したものだといふ。また、浜名は「コマヤ」と「シウカラ」「タカラ」の「カラ」を重視し、日本で朝鮮のことを「カラ」「コマ」などと呼んだのは神祖の時代の言葉の名残だとする。

第5章「神祖の名はトコヨミカトという。シウスサカはその号である。イフ（鑿父）に降臨し、シウ氏（辰沅氏）となった。アシの地にもシウ氏がいてこれが二大系統である。その同族で東の海に現れたものをアシムス氏（阿辰沅須氏）という。アシムス氏の後裔のニギ氏（寧義氏）は東大古族の間で有名になった」

浜名は鑿父をいふりよざん医無閭山（現中華人民共和國遼寧省錦州市）、アシを平壤（現朝鮮民主主義人民共和国首都方面）に、トコヨミカトを日本神話のツクヨミ（月神）、ニギ氏をアマテラスの孫の天孫ニニギにあててゐる。

第6章「神祖の一族はちりぢりになっても民族名を受け継ぐことで系統を明らかにしてきた。馬韓・靺鞨・渤海、珠申・肅慎・朱真はそれぞれ同じ音声で系統を継いでいることを示している。これによって古い歴史をたどることができる」

古代朝鮮半島にあった三韓（馬韓・辰韓・弁韓）の一つである馬韓、隋唐代に現在の中国東北部からロシア沿海州にかけて跋扈した民族の靺鞨、高句麗の後継国家として現在の中国東北部・北朝鮮・ロシア沿海州にまたがって存在した渤海（698～926）、それらの国名・民族名はいずれも「マカ」と読むことができる。漢代以前に現在の中国東北部にいた民族の肅慎、満洲族の前身である女真（珠真・朱真はその別表記）はどちらも「シウシン」の音を伝えた民族名である。浜名の解によれば『契丹古伝』は、東大古族の子孫が、こうした民族名・国名の継承で系統を伝えてきたのだという。

第7章「塙須弗（ウスホツ）の耶馬貽記に曰く。その国が墮落しないのは、深く上古を探り、明らかに先代を觀、審らかに神理を設ね、善く風猷を繩す、職がいるからで

ある。その国の別名は秋洲という。アキシマ（阿其氏末）と読む。アキヒの神名によるものだろう」

「耶馬貽記」はヤマト、すなわち日本国の見聞記のことだろう。「ウスホツ」は日本の正史『続日本紀』に登場する実在の人物である。彼は宝亀4年（773）に渤海国の使者として来日した（『続日本紀』での表記は「烏須弗」）。

しかし、烏須弗が日本の朝廷に提出した国書は礼儀にかなっていないとして受理されず、帰国のための俸禄（旅費）と食料だけを与えられて送還されている。以上の経緯からすると彼に日本での見聞記を書くだけの情報が得られたかは怪しい。

また、浜名も指摘しているが「深く上古を探り」「明らかに先代を觀」「審らかに神理を設ね」「善く風猷を繩す」は太^{おおの}安^{やす}万^{まる}侶による『古事記』序文からの引用である。

『古事記』序文は和銅5年（712）に書かれたとされているから時系列的には約60年後に来日した烏須弗が読んでいてもおかしくはない、ということになる。浜名の解説では「之に由り我が古事記の渤海国に渡つてゐたことが知れる」としているが、もちろんこれについては別の解釈も成り立つ。これについては後に改めて論じたい。

「アキシマ」は大和の異称「秋津洲」のことだろう。「アキヒ」について浜名は神の和魂（平和的な状態の神霊）を意味する語で、これが秋津洲の国名の由来になったとみなしている。

第8章「氏質都礼にいう。アキ（阿芸）、ワイ（央委）、ヤイ（陽委）、ワニ（潢弭）、ハイ（伯弭）、ハイ（潘耶）、アイ（淮委）などの諸族は皆、スサナアキヒから出ている」

「氏質都礼」について浜名は書名であろうが意味も訓読もわからないとしている。アキは秋津洲のアキで、すなわち日本民族の古称、ワイは朝鮮民族の古称、ヤイは中国古典に出てくる東夷の一部族、ワニは中国の河南省方面にいた民族で現安陽市内黄県（あんようし ないこうけん）などの地名に名残をとどめる。ハイ（伯弭）は古代日本の九州にいたという隼人族、ハイ（潘耶）は古代の朝鮮半島にいた扶余族、アイは古代の中国東北部から朝鮮半島にいた濊族（わい）だという。つまり、浜名の解釈によれば、この記述は中国大陸・朝鮮半島・日本列島にまたがる領域に同じ起源をもつ民族が分布していたという意味になる。

第9章「ただし浥婁は異なる民族である。もともとはヤオロチといい、浥且の地にい

た。神祖はこれを討って化育した」

「浥婁」は古代満洲にいたとされる民族・挹婁ゆうろう、「浥且」は朝鮮半島北部にいた沃沮よくそのことだろう。中国正史では挹婁は肅慎、沃沮は扶余と同系とされがちだが、『契丹古伝』のこの個所では別系統の民族とされる。「神祖」は第3章のスサナミコだから、この章はスサナミコがヤオロチという民族を征伐したことを語っているわけで、浜名はこれを記紀におけるスサノオのヤマタノオロチ退治の神話の原形とみなす。

第10章「(神祖はヤオロチに) 禊を命じ、それからカラとして迎えた。禊の場所をアフロという。これが浥婁の名の由来である。アフロは誓約という意味である」

浜名はアフロを現在の中華人民共和国と朝鮮民主主義人民共和国の国境を流れる鴨緑江おろりょくけいじやうのことだとする。カラを第4章で示されたように同族の意味だとすると、神祖は「浥婁」を征伐した後に儀式を行ない、彼らを改めて同族として迎え入れたことになる。

『契丹古伝』の内容——東大古族の発展

第11章「カミスチ（汗美須銓）」にいう。神祖はアシタに都を置いた。その都をヒシヤといい、神京ともいう。ヤチクシウアケにその都を治めさせた」

浜名の解では「カミスチ」は書名で神筋、すなわち神系統譜の意味だという。ヒシヤは平壤、すなわち現朝鮮民主主義人民共和国の首都である。

朝鮮半島の史書『三国遺事』（13世紀末の高麗の僧・一然イリョンの編著）にある朝鮮の建国神話では、朝鮮の祖・檀君王タンゴンワンゴムは平壤城に都し、そこから阿斯達アサダルという別の都に移って、後に山神になったとされている。浜名は『三国遺事』で平壤と阿斯達を別の都とするのは捏造で、アシタとは平壤のことであり、さらに中国の史書で三韓の統治者である辰王シンオウがいたとされる馬韓・月支国ツクシコクのことでもあったとする。また、ヤチクシウアケについては日本神話で出雲の統治者とされる八千矛ヤチホコ神と関連付けている。

第12章「（神祖は）シラヒキアケに命じてカムカに派遣した。その地をカコヤといい、

仲京とした」

『三国遺事』の新羅建国神話には辰韓、後の新羅には6つの村があったとあり、その一つを高虚村という。浜名はカコヤをこの高虚村、カムカを現大韓民国慶尚北道の迎日湾にあてる。

また、新羅の国名と、日本の出雲神話に白日神しらひのかみの名があること、『古事記』の国生み神話で筑紫（現福岡県西部）の別名が白日別しらひわけとされることから、シラヒキアケは朝鮮半島南部から日本の九州北部・山陰地方にかけての広域をおさめていたとみなす。

第13章「(神祖は)アタカシコメに命じてカクタラに派遣した。その地をシホヤといい、海京とした」

アタカシコメの「アタ」は鹿児島県阿多郡あたぐん(現日置市・南さつま市の一部)、「カシ」は鹿児島県加世田市かせだし、「コメ」は女性への尊称ヒメ(姫・媛)に通じるということで、浜名はアタカシコメを南九州の神女だったとする。カクタラは鹿児島の国浦(入り江)、シホヤは潮

の宮ということでの状況から海京と呼ばれたとする。

第14章「ウサハミコメに命じて、ムコハキに派遣した。その地をヒレヤといい、齋京とした」

『日本書紀』には「一書に曰く」として引用された伝承に、スサノオの娘の三姫神（現福岡県宗像市の宗像大社の祭神）^{むなたし}はいったん筑紫の宇佐島^{うさじま}に降臨してから宗像に移ったという記述がある。この宇佐島について現大韓民国慶尚北道の鬱陵島^{ウルルンド}や現大分県宇佐市と結びつける説があるが、浜名はウサハミコメの「ウサ」はこの伝承および出雲神話の「因幡^{いなば}の白うさぎ」に関連するものとする。また、「ハミ」は蛇に通じるといふ。出雲神話では蛇を払うヒレ（領巾、肩掛けにする布）が出てくるが、齋京の「齋」には払うという意味があるので、ウサハミコメは蛇を払う呪術に関わる神女だったのではないかという。ムコハキについては、あるいは現山口県萩市^{はぎし}のことかとする。

第15章「キリコエアケに命じて、フカムを治めさせた。この地はシラヤマといい、神

祖が最初に降臨した地でもあることからスサモリの京ともいう。キリコエアケはネクタに宮を置いた。その地はソトヤともいい、離京とした。キリコエアケは生まれながらに異相で、頭に角があり、好んで鬼を捕らえた。二十四通りの呪術を広め、今でも験（効き目）がある」

キリコエアケの「キリ」は現中華人民共和国の吉林省に通じ、「コエ」は契丹語で玉の意味ということでキリコエアケは玉の産地でもあった長白山（白頭山）の神霊とする。

フカムは中国古典の『山海経』で肅慎の国にあるとされる不咸山、シラヤマは「白山宮」でいずれも長白山を意味する。スサモリとは神祖（日孫）スサナミコが降ったという意味で東大古族の伝承では神祖について第5章の医無閭山降臨説と別に長白山降臨説もあったのだろうとする。ネクタは寧古塔（現黒龍江省牡丹江市寧安市の古名）、ソトヤは外宮で離京と同義だという。キリコエアケに角があり、呪術を広めたというのは日本の陰陽道という牛頭天王（祇園神社の本来の祭神でスサノオと習合）に関連するという。

第16章「西征頌疏にいう。神祖は西を征した。ウシアケにカメナトの城を置かせ、サ

カアケにアシナトの城を置かせ、ユキアケにケシセマの城を置かせ、神祖自らは西の海ニレワタを渡って西の陸に夕日を見送るところヒイクイの岡に至り、都を築いた」

浜名は、ウシアケが城を置いたカメナトは現遼寧省大連市（金州・旅順方面）、サカアケが城を置いたアシナトは遼河河口（リョウガ）、ユキアケが城を築いたケシセマは河北省の秦皇島（しんこうとう）だとしている。また、神祖が西の都を置いたヒイクイについて、浜名は山東省であろうとする。浜名の考証のくわしい根拠は省略するが、大連市・遼河河口はいずれも日清・日露戦争において日本から戦略上の重要地点と目されていたところである。

第17章「秘府録にいう。神祖はアシアから国を拓き、それを五原にわけた。ハキシノワケはマコクを治めた。これを西原という。ワタシカワケはヤコクを治めた。これを東原という。ナキクシコメはイラキを治めた。これを中原という。イカタチワケはサハキを治めた。これを北原という。ウナミチワケはナカハを治めた。これを南原という。（以下22字、浜名は解説不能とする）」

中国古典の『尚書（書経）』『堯典』では天下を四方に分けて東を暘谷、西方を昧谷、北方を朔方、南方を南交と名付けている。また、やはり『尚書』の「禹貢」では、中国の中原を流れる伊水と洛水の流域を合わせて伊洛と呼んでいる。つまり『尚書』の古代中国地理認識とこの「秘府録」からの引用という地理認識には、マコク＝昧谷、ヤコク＝暘谷、イラキ＝伊洛、サハキ＝朔方、ナカハ＝南交という対応がみられるという。

浜名はこれについて、『契丹古伝』の方が「従来の漢籍観を以てすれば、堯典禹貢を本とし作為したもの」ということになることを認めながら、あえて漢民族の方が東大古族の地理観をとりいれて『尚書』に記したという説を唱えるとした。

第18章は東大古族以前の中国の先住民に関する記述、第19章は神祖の子孫の繁栄、第20章は「神統志」という書物からの引用として東大古族が祀る祖霊に関する記述だが本書では省略する。

『契丹古伝』の内容——東大古族と西族の対立

第21章「費彌国氏洲鑑」の賛にいう。海が砂漠に変わるほどの異変があつて大地は西に縮まり、ノコロが海となつて東の天は遠くなった。洪水と大火の災いを経て、西族が入ってきた。牛の首を神に祭るものや蛇身を鬼として祭る者が吾らの神子の名から古代の聖王を捏造し、聖人を自称した。古代の聖王とされる堯と舜は東大古族の君主の霊であるシフの名から作られたものである。東大古族と西族の混血から君主となつた最初の者は夏王朝の祖・禹だつた。しかし、禹と夏の名は東大古族の君主号シウクシフのウとクからとつたものである」

浜名は「費彌国氏洲鑑」の「費彌」について、馬韓の王家だつたヒミ氏のこと（ヒミ氏については後述）であり、「洲鑑」は「シウカガミ」で東大古族の歴史書の意味だとする（日本では『東鑑』など「鑑」を歴史書の意味に用いる例がある）。

浜名は、ユーラシア大陸の中央にあつた海湖が地殻変動によつて砂漠となつたことは「今の科学からも承認されよう」と述べている。さらに浜名は、この大異変の記述について古

代の東大古族が「推理からではなく、天地の大変を實在に目撃しての叫喚が、怖れと驚きとに語り継がれて、後の世の古き古潭になつたのであらう」とする。

また、浜名は日本列島と大陸とがかつては地続きだったという地質学上の知見から、ノコロが海になつたというのは「日韓をつないでいた大陸の陥没をいふたものかも知れない」とする。また、ノコロは日本神話で国生みの前にできた島として語られるオノコロと似ているとして、陥没した大陸の名を新たに生まれた島に移し替えたものではないかとする。

浜名曰く「近代の科学は近代人の新発明と称すれど、いづくんぞ識らん死せる祖先の記憶の甦れるにあらざるなきを」。

つまり浜名は『契丹古伝』のこの個所は近代科学（地質学）の知見と一致しているということを強調しているわけである。

続く洪水と大火の災いについて、浜名は、中国神話から、洪水については中国の聖王・堯の時代に洪水が続いたという伝承を、大火については天に十の太陽が同時に現われて地上が焼き払われたという伝承をそれぞれ引いている。

『史記』三皇本紀（司馬遷の筆になるものではなく唐の司馬貞による補筆）には、古代の聖王である伏羲・女媧・神農について、伏羲と女媧は人面蛇神、神農については牛頭人身と記

している。つまり『契丹古伝』の牛首蛇身云々という記述は西族の子孫である漢民族が、東大古族の歴史を盗んで自分たちの祖先にすりかえる際に、自分たちの信仰に基づいて異形の姿を与えたと主張しているわけである。

第22章「昌と堯が兵を率いて出発するにあたっては、賄賂で夏を乱し、その上で武力を用いた。ついに臣下が君を弑して、乍人の刑を行なった」

昌と堯とは周王朝の祖である文王・姫昌きしょうと武王・姫堯きはつの父子である。周が殷王朝（商王朝）を滅ぼした殷周革命の顛末は明代に『封神演義』ほうしんえんぎという白話小説はくわに仕立てられ、日本でもその翻案が漫画やアニメになっているので親しんでいる人も多いだろう。

『封神演義』では正義は周の側にあるわけだが、浜名は『契丹古伝』のこの記述に基づき、西族の国である周が姦策かんさくで殷を弱体化させ、その上で、武力により君主を討つという非道を為したと断じている（「夏」はこの場合、夏王朝ではなく中国の意味）。

「乍人の刑」について、浜名は、乍には、噛む・食うの意味があるので、料理されたという意味ではないかとしている。

第23章「ハク（伯）族は声を上げたが成功せず、ワ（和）族は征したが勝てず、ヤ（陽）族は孟津で敵を防ぐに勇猛だったがイ（易）族に背かれ、周の軍勢は牧野で勝って次にワイ（淮）族やジョ（徐）族と戦い、キョウ（姜）族は殷の内側から火を放ち、商（殷）の祭祀はついに滅びた。ワニ（潢）族は海に浮かんで逃れ、エツ（宛）族は南に去った。これというのも朱申（肅慎）の宗家が賄賂に毒され裏切ったからで東委（東大古族）はことごとく廃れた」

周が殷を攻めた時、孟津（現河南省孟州市近辺）で諸侯を集め、牧野（現河南省衛輝市近辺）で殷軍と決戦したことは『史記』にも記されている。『契丹古伝』では、この戦いに際して東大古族の有力勢力だった肅慎氏とそれに従う易族、姜族が殷を裏切ったのが殷側の敗因になったと説明している。浜名は海に逃れたというワニ族は日本列島に向かったと想定する。また、エツ族については春秋時代に現浙江省方面に建国した越人だとしている。

第24章「殷が滅びた時」武伯と智淮は国内に止まった。智淮は（周の）虜となっていた子叔キシヨを奪い、カレキに城を築いてシウイン（辰法殷）という国を建てた。こ

の国は智淮氏燕とも呼ばれた。姫発（周の武王）はキシヨを箕子として賄賂を送り、周の封国ということにしようとしたがキシヨは殷の王族としてこれを拒んだ。韓と燕の軍勢が攻め込んできたのでイフルに都を移した。イフルはキシタエのマクヒの地であり、キシタエとか神子キリコエの別名だという」

『史記』は殷が滅びた時、殷の王族の箕子^{きし}が東に逃れて朝鮮を建国したことや箕子朝鮮が周による冊封（名目上、臣下の礼をとること）を受け入れたことを記す。『契丹古伝』は殷の滅亡後も伯族の武伯と淮族の智淮が抵抗を続け、智淮が殷の王族であるキシヨを助け出してシウインという国を建てたとする。つまり朝鮮というのはシウインもしくはその別名の智淮氏燕の音写というわけである。中国史と異なるのは、シウインは周に臣下の礼をとるのを潔しとせず、周の諸侯国である韓^{かん}や燕^{えん}の軍勢に追われても都を移して独立を保ったという主張である。シウインが当初建国したカレキについて浜名は現河北省秦皇岛市^{しやうらいげん}昌黎県だとする。イフルは医無閭山のことだが、「マクヒ」について浜名は杭打ちの儀式が行なわれたという意味だとしている。

第25章「武伯の山軍が雄たけびを上げて南に進んだ時、ニギシの船団と弓兵とが海岸で合流した。高令は国を挙げて先駆となり、行軍歌を歌った。タニハ・タマモ・カサキ・イツモ。イソススミコト（以下六字訓読不可）」

武伯が周へと反撃の軍を起こした時、ニギシという水軍勢力と高令が協力したという記述である。浜名は「高令」については中国古典で周代の異民族として記される高夷・孤竹・令支のことで後世の高句麗につながる民族だとする。

また、ニギシは日本神話の天孫ニニギのことで日向国（現宮崎県）への天孫降臨とは、大陸に進軍したニニギが凱旋して九州に到着した史実の表現だとする。

進軍歌のタニハは丹波^{たんぱ}（現京都府中部・兵庫県中東部方面）、カサキは笠沙^{かささ}の崎^{みさき}で現鹿児島^{のまはんとう}県野間半島、イツモは射手、タマモは船乗りのことでそれぞれ弓兵と舟師の意味だという。また、イソススミコトは五十鈴（伊勢神宮の内宮を流れる川）の命で、伊勢に祀られているサルタヒコのことだという（天孫降臨神話ではサルタヒコがニニギの道案内を務めている）。

第26章「武伯はケムソを追いかけて捕らえ、ニギシはこれを斬り殺した。東大古族の

諸族は喜んで宴を開いた。これをユウニの誅という」

浜名は、ケムソ、ユウニとも意味不明とする。ただし、ケムソについては神話上の扶余の祖に解慕漱かいぼそという人物がいるので、その名と通音とすれば扶余と同族で他の東大古族を裏切ったという肅慎のことではないかとする。

第27章「ここにおいて燕を降伏させ、韓を滅ぼし、齊に迫り、周を破る」

燕・韓（朝鮮半島の韓国のことではない）・齊せいは周の諸侯国で春秋戦国時代には大国となる勢力である。周は紀元前8世紀頃、「犬戎けんじゅう」という異民族にいったん滅ぼされてから再興するが、諸侯国を抑える力を失い、中国は春秋戦国時代の乱世に突入する。浜名はこの犬戎も東大古族の中に含めて考えている。『契丹古伝』のこの記述は、周をいったん滅ぼした戦いには犬戎だけではなく、他の東大古族も加わっていたということを示すというわけである。

第28章「辰殷大記はいう。殷叔は老いて子がなく、ウエが東に凱旋しようとする時にミコを養い、寿89歳にして死んだ。こうしてトコヒコミコが後を継いだ」

「辰殷大記」はシウイン、すなわち箕子朝鮮の史書という意味。浜名は、ウエは『遼史』にある契丹の貴族の称号「宇越」で日本語の「うえ」（上）でもあるとして、ここでは周を攻めるのに参戦した天孫ニニギのことだという。この章は、殷叔（箕子）がニニギの御子（御子）のトコヒコミコを養子にして後継ぎに迎えたということで、すなわち箕子朝鮮が日本の皇室と系統を同じくする国家になったことを示すという。

第29章「費彌国氏洲鑑の賛、前言より続く。300年後、運は続かず、武伯の子孫は衰えて二系に分かれ、一方は弁に合流し、もう一方は秦に入った。秦が強くなったのはそれからである。燕は国境でシウインを圧迫し、シウインは東に遷都した」

浜名は弁について、漢代に隆盛した北方の遊牧騎馬民族・匈奴きょうどのことだとする。秦が後に春秋戦国時代の乱世を鎮め、始皇帝による中華の統一を成し遂げたのは周知の通り。

第30章は遼東に遷都した後のシウインの隆盛について記すものだが、その遷都を祝ってワイ王（倭王）から東表（東の海）のクルタシロスが有していた剣が贈られてきたという記述がある。浜名はクルタシロス（こうれい）を孝靈天皇（『日本書紀』によれば在位紀元前290～紀元前215）にあてる。以下36章まではシウインが漢に攻められて滅亡した後のその後継国家である辰（馬韓）が朝鮮半島で独立を保つたいきさつが記される。

第37章・第38章・第39章は辰の王家となったヒミ氏が匈奴と同盟して漢を防いだこと、高令を招いて北の守りとしたこと（この高令が後の高句麗になったことが暗示される）、イサカワに使いを送ってシロスにも協力を求めたことを記す。『契丹古伝』本文によると、『費彌国氏洲鑑』なる文書の記述はここで終わっているという。

このイサカワについて、浜名は記紀で開化天皇（かい）（『日本書紀』によれば在位紀元前157～紀元前98）の宮があったとされる率川（いさがわ）（現奈良県奈良市本子守町・率川神社周辺）の地にあてている（つまりここでのシロスは開化天皇ということになる）。

孝靈天皇・開化天皇は、記紀ではその事績が記されておらず、現在の歴史学では実在は疑わしいとされるが、浜名は当時の「常識」に基づき、その実在を自明のこととして『契

丹古伝』解説にとりいれたわけである。

第40章「洲鮮記にいう。ここに辰の廢墟を訪れる。巫女だったあのイヨトメは民を率いてマカ（末合）となった。空には鵲の声が響き、風が吹いて星は冷たい光を放つ。東の方に大きな丘があるが誰の塚なのかはわからない。弔う人もなく秦の城は静かにとどまっている。シウインの繫榮はどこに行ったのか。はるか昔のこととなった。ただ、真人が現われるのを待つのみである」

「洲鮮記」は書名。浜名は正史『三国志』魏志東夷伝韓条（いわゆる「魏志韓伝」）で辰韓国内の一国として出てくる洲鮮国の廢墟について記した書という意味かとする。

イヨトメは辰すなわち馬韓の王統・ヒミ氏の王女だと思われる。浜名はこのイヨトメを、『三国志』魏志東夷伝倭人条（いわゆる「魏志倭人伝」）で、倭の女王卑弥呼ひみこの死後に後を継いで女王となった壹与とよと同一人物とする。末合は靺鞨もくかくのことで、浜名はイヨトメは馬韓の女王として満洲に散っていた東大古族の諸部族をふたたびまとめ、靺鞨を再興したのだという。「秦城」というのは馬韓が漢代に秦からの亡命者を受け入れたことからの呼称で、彼

らは日本に渡来して秦氏（古代日本に製糸織物などの技術を伝えた渡来系氏族）になったとする。

つまり、浜名は「魏志倭人伝」で倭国の女王として記されている卑弥呼と壹与は馬韓の女王であり、「魏志倭人伝」の地理的記述が難解なのは、その著者が平壤にあった倭の女王の都と日本列島の邪馬台国（大和）を混同したまま書いたからだといふのである。

さらに浜名はこの「洲鮮記」の引用について、引用の末尾で待望されている「真人」を契丹王になぞらえ、契丹による東大古族再興の舞台を整える意味だとする。

『契丹古伝』の内容——契丹王宮の奇瑞と編纂の理由

ここからは『契丹古伝』そのものの編纂の由来に関する記述である。

第41章「天顯元年の元日、契丹の太祖天皇王が東に上る日を拝すると丹鷄（赤いニワトリ）が下りてきて楼閣の上を飛んだ。太祖は勅を出してその鷄を探させたが見つけることはできなかった。会同元年6月、丹鷄がふたたび現れた。その行方を探させると医無閭山から美しく輝く石が出てきた。その表面には紅谷や紫の線が浮かび文字の

ように見えた。すなわち古頌であった」

天顯元年是遼^{りょう}（契丹が中国華北に建てた国）の年号で西暦926年。太祖天皇王は契丹の可汗で遼の建国者・耶律阿保機^{やりつあほき}（872～926）のこと。会同元年是遼の太宗（耶律堯骨、902～947）の年号である。古頌とは古の讃歌のこと。

第42章「皇上（遼の太宗）は喜んで言った。自分の祖先は炎帝キキタエから出ている。かつて祖先が栄えた五原をふたたび取り戻さなくては祖先に顔向けができない。まさにその目標に向かうべき時だ、と。新たに神を祭る廟を建て、自らその祭主となって石に浮かんでいた古頌を歌った」

第43章・第44章・第45章は石に浮き出たという古頌の浜名による音読である。浜名はこの歌詞の中に「魏志韓伝」に出てくる馬韓語の歌と同じものがあるとし、さらにそれは古代日本語としても解釈できることを発見して『契丹古伝』全体の解読の手掛かりにしたという。

第46章「応天太后は学者を集めた。太祖は彼らに言った。我が祖先の葛禹図可汗の名は神宝の冑によるものである。可汗とは日神の体のことであるという。誰かその言葉の源流を遡ることはできないか、と。学者たちはあまりにも昔のことと言葉の音も変わっており、遡るのは難しいと答えた。太后は、音韻を明らかにすれば神に通じることもできるだろうと古頌に琴で曲をつけ、楽人に命じて採譜させた。私、羽之はこのいきさつを記録し、伝を叙した。大同五年六月のことである」

応天太后は耶律阿保機の皇后・淳^{じゆんきんじゆつり}欽述^{しんじゆつ}律皇后（879～953）のこと。葛禹図可汗は後漢・三国時代の鮮卑族の首長の一人で、後世には契丹の祖の一人とされた。中国史では「葛烏菟」と表記される。ここでは彼のその名は冑に由来するものとされている。つまり、「カウト」という名は日本語「かぶと」と通音というわけだ。

この第46章にいたって『契丹古伝』は、遼太宗の時代に起きた瑞祥（丹鷄の出現と古頌が浮き出た石の出土）にちなんで羽之という人物が編纂したものであることが明らかにされる。この羽之とは遼建国時の重臣・耶律羽之^{やりつうし}（840～941）のことである。

926年、契丹は渤海国を平定した。契丹では渤海の故地とその民を治めるために東丹とうたん国という傀儡かいらい国家を建てたが、その王として派遣されたのが羽之その人である。

学問好きだった羽之は渤海国で所蔵されていた書物を保護し、それは遼建国に際して遊牧民だった契丹が中華の制度を採り入れるうえでの参考にされた。浜名は『契丹古伝』に出てくるさまざまな書名はもともと渤海で伝えられていたものではないかと唱える。

『契丹古伝』は、東大古族の正統王朝が、殷—シウイン—辰（馬韓）という形で継承されたと主張している。その主張からすれば契丹は傍流というわけだが、高句麗を介して馬韓の後継国家だった渤海を併合することで契丹はその正当性を受け継ぐことになったというわけである。東丹国王で学者肌だった羽之はその編纂者として、いかにもな人物である。

また、『契丹古伝』が偽書であるにしても、羽之はその作者として仮託されるにふさわしい人物であるといえよう。

以上が『契丹古伝』の内容である。東アジアの壮大な太古史を語っているように見えて、その実、当時の日本によるアジア侵略を正当化するような要素に満ちている。

浜名は『日韓正宗遡源』序文で関東大震災時の朝鮮人虐殺について記し、「知らず是れ何に原因して現はれたる事相なりや」、すなわち一体何が原因だったのかと嘆じた。浜名にと

って、この惨劇がもたらした衝撃とその原因究明への意思が、なぜ、『契丹古伝』の解読と公開という行動に結びついたのか。これから、その意味を考えていきたい。

第
2
章

関東大震災
朝鮮人虐殺の記録
証言を読む

志賀直哉が出会った殺害者たち

近年、関東大震災に関して朝鮮人虐殺否定論や朝鮮人殺害正当防衛論を唱える人々が現われ、SNSを通じて影響力を増している感がある。

しかし、関東大震災直後に書かれた文献で朝鮮人虐殺事件に言及しているのは『日韓正宗遡源』だけではない。多くの著述家が自らの見聞として、朝鮮人が放火したり井戸水に毒を入れたりしているという噂が流れていたこと、自警団による朝鮮人狩りが行なわれていたこと、殺害者たちが蛮勇ばんゆうを誇っていたこと、そして殺害者たちを駆り立てた噂がデマにすぎなかったことを記録している。この時代の書籍を読みなれた者にとっては、朝鮮人虐殺否定論を真に受ける人が大勢いることの方が不思議なくらいである。

にしぎまさお西崎雅夫氏が編纂した『証言集 関東大震災の直後 朝鮮人と日本人』(2018)には関東大震災を体験した人々の記録が多数収められている。その中から、朝鮮人殺害に関連して文化人による特に生々しい記録を引用しよう。

大正～昭和初期の文芸主流だった白樺派を代表する作家・志賀直哉しがなおや(1883～1971)は、1923年当時には京都に住んでいたが、新聞号外で震災を知り、東京の実家きゆうきよに急遽帰った。信越線を利用して関東に入った時のことを次のように記している。

軽井沢、日の暮れ、駅では乗客に氷の接待をしていた。東京では鮮人が爆弾を持って暴れ廻っているというような噂を聞く。が自分は信じなかった。

松井田で、兵隊二三人に野次馬十人余りで一人の鮮人を追いかけるのを見た。

「殺した」直ぐに引返して来た一人が車窓の下でこんなにいったが、余りに簡単すぎた。今も半信半疑だ。

高崎では一帯の空気が甚く険しく、朝鮮人を七八人連れていくのを見る。

(中略)

そして大手町で積まれた電車のレールに腰かけ休んでいる時だった。丁度自分の前で、自転車で来た若者と刺子を着た若者とが落ち合い、二人は友達らしく立話を始めた。

「―叔父の家で、俺が必死の働きをして焼かなかったのがある―」刺子の若者が得意気にいった。「―鮮人が裏へ廻ったてんで、直ぐ日本刀を持って追いかけると、それが鮮人だねえんだ」刺子の若者は自分に気を兼ね一寸此方を見、言葉を切ったが、直ぐ続けた「然しこう云う時でもなけりゃあ、人間は斬れねえと思ったから、到頭やつちやったよ」二人は笑っている。ひどい奴だとは思ったが、不断左う思うよりは自分も気

楽な気持ちでいた。

（志賀直哉「震災見舞」『新興』第1号、1924年2月、初出）

なお、日本文学専攻の児玉千尋^{こだまちひろ}氏は、志賀の「震災見舞」での冷徹な視線について次のように述べている。

震災にあい、命からがら逃れ、物資は不足し、情報が遮断されるといった極限状態から縋言は広まっていた。そのような状況に途中参加する、地方からの上京者には、国籍や訛りを根拠に一般市民が人を殺す世界は「余りに簡単過ぎ」奇異に映ったことだろう。

（児玉千尋『文豪たちの関東大震災』2023年）

詩人・歌人たちの証言

秋田雨雀^{あきたうじゃく}（1883～1962）はヘンリク・イプセン（1828～1906）の翻訳で知られる戯曲家・児童文学者である。彼が自らの震災当時の日記から抜粋した文章を寄稿した『改造』は大正から昭和初期にかけて社会主義者の論説を多数収録したことで知られる雑誌で、その文章が掲載された大正12年12月号は関東大震災後の復興と社会改革をテーマ

とする特集号であつた。

九月五日（日）晴

汽車の中で目を覚す。

沿道は最早戦乱の巷だ！

槍を持った者

長剣を持った者

鳶口を持った者

旗を持った者

棍棒を持った者

これ悉くわが国土を守る勇士課かと思えば、豈はからんや、流説に動かれて数百人の人類同胞をほふつた憐れむべき犠牲者だ！その一人は車窓の前に立って、

「この槍でやつたんです……え、これでやつたんですもの」

と意気公然たる者だった。

（中略）

「君実は大事件じゃありませんか・・・僕は淋しい気がします」

と僕が言うと、その学生は眉をひそめて、

「ほんとうに然うです。朝鮮人も人間だということが、この人達に解らないんでしょうか？」

と言った。

「人間」を「人間」だと思えない私達日本人は一体何んな教育を受けて来たのだらう？

ああ、この簡単な「人間」ということ！

（秋田雨雀「多難な後半期」『改造』1923年12月、初出）

くろき ただまつ
黒木伝松（1900～1967）は宮崎県日向市出身の歌人。青年時代に、歌の師である
わかやまぼくすい
若山牧水（1885～1928）を頼って上京し、関東大震災の難に遭った。〇〇の伏字に入るのは「鮮人」である。

道は戦場さながらである。道の両側は後鉢巻でうずまっている。竹槍でうずまっている。吾が自動車は道道十数間も行かぬうちに呼びとめられた。提灯の灯は容赦なく私

達の顔につきとけられた。もし〇〇でもあろうものなら忽ちあの竹槍で一さしである。

(中略)

「〇〇だな」と思った。両手を針金で後にくくりあげられたまま仰向に、或は横に、うつぶしに倒れて死んでいる。着物は彼らの労働服だ。顔はめっちゃめっちゃである。頭、肩にはいづれも大きな穴があいて居り、血がひからびてくっついていて。そこにはまた首のない死体がある。首が肩の際から立派に切り取られている。見事に切ったものだ。

(黒木伝松「震災見聞記」『創作』1923年10月、初出)

画家としても詩人としても名を馳せた竹久夢二たけひさゆめじ(1884～1934)は1923年9月19日の『都新聞』に「自警団遊び」という絵入りの風物案内を寄せている。

東京郊外の子供たちが大人をまねて自警団遊びをはじめたというもので、朝鮮人役をおしつけられた子供が、竹槍でつかれるのを嫌がるうちに泣くまで殴りつけられてしまう様を描いたものである。

画家の水島爾保布みずしまに おう(1884～1958)は1924年4月に著書『新東京繁昌記 大阪繁昌記』を発表して震災後の東京の復興への歩みを記録した。この書籍はいったん発禁処

分を受け、同年6月に改訂版としてようやく流通を許されたものである。

ところが近年、国立国会図書館のデジタルコレクション公開により、発禁版の現存が新たに確認された。美術史家の前田恭二氏まえだ きょうじは、改訂版から削除された震災直後の記録「愚漫大人見聞録」を小冊子として翻刻編集している（前田恭二編著『関東大震災と流言―水島爾保布 発禁版体験記を読む』2023年）。

その中には、大学講師の名刺を持った人物が、水島の刀剣コレクション目当てに刀を借りに来たが「朝鮮人をお斬りになるんですか」と聞くと「まあそんな事で…」と大して物騒なことでもなさそうに言うので断ったという記述がある。

関東大震災被災者によるこの種の証言は、同時代からすでに多数あった。さらに後年の回想まで含めると枚挙にいとまがない。

東京都内に限っただけでも、西崎雅夫氏が震災直後以来の活字化された証言・記録を丁寧にとめた『増補百年版』関東大震災朝鮮人虐殺の記録』（2023）という名著がある。

詩人の萩原朔太郎はぎわら たくたろう（1886～1942）は震災の翌年、わずか三行に万感の思いをこめて一片の詩を記した。

近目所感

朝鮮人あまた殺され

その血百里の間に連なれり

われ怒りて視る、何の惨劇ぞ

（『現代』 1924年2月号、初出）

朝鮮人虐殺事件は当時の人々にとって生々しい体験であり、後世に捏造できるような性格のものではなかったのである。

日本政府も教訓として重視

現在の日本政府も朝鮮人虐殺事件は、防災上の教訓として重視している。内閣府防災情報としてWeb上に公開された『災害教訓の継承に関する専門調査会報告書 平成21年3月』では、「混乱による被害の拡大」というテーマに一章を割き、その内容を次のように要約している。

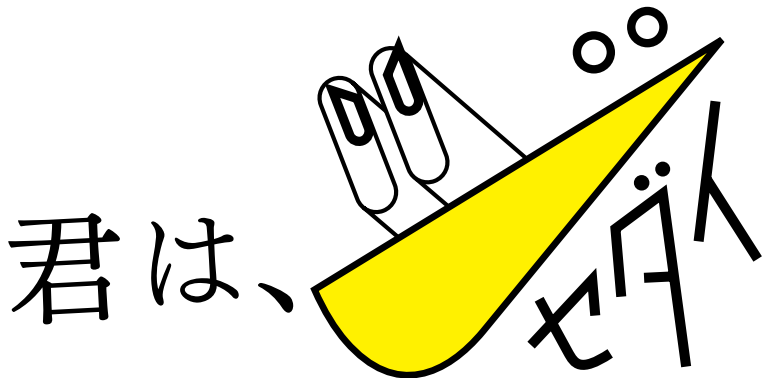
「関東大震災時には横浜などで略奪事件が生じたほか、朝鮮人が武装蜂起し、あるいは放火するといった流言を背景に、住民の自警団や軍隊、警察の一部による殺傷事件が生じた。流言は地震前の新聞報道をはじめとする住民の予備知識や断片的に得られる情報を背景に、流言現象に一般的に見られる『意味づけの暴走』として生じた。3日までは軍隊や警察も流言に巻き込まれ、また増幅した」

ちなみに同報告書では「殺傷事件の検証」というコラムを設け、被害者数について、山^{やま}田昭^{だしやうじ}次氏の研究に基づいて二つの説をとりあげている。

その一つは在日本関東地方罹災朝鮮同胞慰問班の初期の調査に基づいて再計算した2607余〜3459余人というものであり、もう一つは、上海の大韓民国臨時政府が発行した『独立新聞』が1923年12月5日に掲載した記事に基づいて再計算した6644人である。事件そのものが震災による混乱の最中だったということもあり、正確な数値はつかみにくい、現在の日本政府も数千人規模の被害者を出した大量虐殺事件であったことは認めていることになる。

なぜ、このような惨事が起きたのか。そもそも、なぜ、関東での災害において数千人規

模の虐殺被害者を出すほどの朝鮮人が日本にいたのか。その原因をつきつめていえば、東アジアの小国から、一気に列強と並ぶ大国を目指すことで当時の日本が抱え込んだ矛盾であつた。この問題については章を改めて論じたい。



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!